

ヤガタフクログモをめぐるヒメバチ2種の季節消長と寄生習性に関する研究

大阪市立自然史博物館 松本吏樹郎

ヒメバチという寄生バチの中には、クモやその卵を食べて大きくなるものがあります。別寒辺牛湿原のヨシ原を見わたすと非常に多くのフクログモのなかまの巣（正確には卵を生むために作る部屋）が見つかります。巣の中には♀のクモや卵、あるいは卵からかえった幼虫などがいますが、時々ヒメバチの幼虫が見つかることがあります。5月から9月まで、別寒辺牛湿原でこのような巣をたくさん調べたり、マレーゼトラップ（図1）というワナに入るクモを調べたり



した結果、そのほとんどがヤガタフクログモというクモで、一部がヒメフクログモというクモであることがわかりました。またこれらのクモは6月から巣を作り始め、7月から8月に産卵し、8月にかけて子グモがふ化することがわかりました（図2）。そして3~7%の割合で2種のヒメバチ（図4）が寄生することもわかりました。

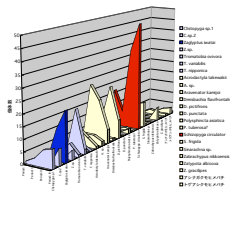
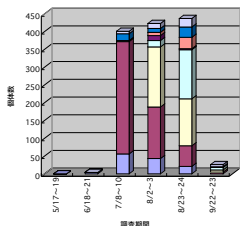


図2. (左) ヤガタフクログモの巣の中の様子の季節変化
図3. (右) 別寒辺牛湿原のクモヒメバチ類の消長

*Zaglyptus iwatai*はクモの巣の外から産卵管を突き刺し、クモをほとんど殺してから、いくつかの卵を産み込み、かえった幼虫はクモの卵の汁を吸って成長します（図5）。もう1種の *Schizopyga circulator*というヒメバチの産卵方法はこれまで知られてなかったため、今回じっくりと観察したところ、ヒメバチとしては非常に変わった方法をとることがわかりました（図6）。クモの巣を見つけた♀は巣をつなぎ合わせている糸をかみ切り、クモの巣に入り込みます。さらにクモに向かって飛びかかって針で刺して麻酔し、クモの体に卵を産み付けます。

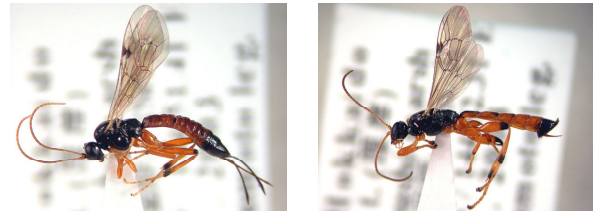


図4.ヤガタフクログモを寄主とする2種のヒメバチ.
(左): *Zaglyptus iwatai*, (右): *Schizopyga circulator*
これはベッコウバチという狩りバチのグループで見られる行動で、全く別のグループであるヒメバチで見られるのは驚きです。

マレーゼトラップで採集されたヒメバチを調べてみると（図3）、夏の終わりにかけてこれらのヒメバチの数が増えています。野外の調査で6月から9月まで成虫が見つかったことと、約20日程度で卵から成虫になることから、1年にいくつかの世代を繰り返すと予想されました。



図5. *Zaglyptus iwatai*の産卵行動、幼生期



図6. *Schizopyga circulator*の産卵行動、卵